

地味チョウシリーズ⑬

カラフトタカネキマダラセセリ

Carterocephalus silvicola



はじめに

カラフトタカネキマダラセセリ。日本一長い和名でもあり私たち蝶屋はカラタカと呼んでいます。日本では道東のみに分布し、極小ではありますがハイセンスなデザインの翅を持ちかなり人気の高いチョウで、地味チョウシリーズの一員にするにはちょっとためらいはありますが、カラタカ君お許してください。私のカラタカ君との出会いは北大虫研で道内に戻って来てからです。紋別市で中学2年間網を振っていたのですが出会えませんでした。採集記録を見ると初対面は1974年の6月28～30日丸瀬布遠征のようです。今思い出すと、本種もそうですが、林道沿いのスモモを叩いてリンゴシジミを追いかけてたり、吸水するオオイチモンジにドキドキしながら近づいたりワクワクの採集行でした。今は丸瀬布昆虫館が建っているあの有名な林道です。1974年といえばヒメチャ事件が勃発した年です。まじめに幼生期などの観察にのめり込むのはヒメチャの後で生態写真は残っていません。生態観察を記録をまとめた「道新本」では、ヒメチャの後活躍した虫研の後輩、紀藤・白井組たちの写真を借用しています。(右)バイブル「生態図鑑」の渡辺御大も、彼らのフィールド忠類村で撮影されたもので、幼生期の生態は1980年以降明らかになってきたものなのです。



▲日光浴する♂ (1985 6 8日高管内日高町子ロ川)



▲吸蜜する♀ (1979 6 21 十勝管内忠類村)



▶上・葉のへりの跡
下・葉中の終齢幼虫 (1980 9 28 十勝管内忠類村)

はじめに2

「道新本」以降もなかなか本種とじっくり向き合うことは叶いません。マイフィールドに本種がいる環境を得たのは、道東の標茶高校に赴任してからです。ウラジャやサトキマヤマキでも紹介しましたが学校林に敷地にある「軍馬山」は偉大なフィールドでした。2007年4月1日、引っ越しを終え妻と共に高校に挨拶に出向き玄関に足を踏み入ると「教頭先生！今、牛が生まれるよ～こっちこっち」と女性職員が私の手を引っ張って牛舎に連れて行きます。立派な牛舎の中に恐る恐る入っていくと、実習服を着た生徒達の見守る中、牛の赤ちゃんがまさに生まれるところでした。赤ちゃん牛は無事だったようでみんなが拍手をして見物は終了。畜産の先生たちに初対面の挨拶をし、少し校舎を案内してもらいました。広大な牧草地の向こうに広がるナラの森が気になり聞いてみると「あれはうちの軍馬山」と初めてその名を知りました。標茶高校は以前は釧路集治監、戦前は陸軍の軍馬補充部という施設だったそうで、軍馬山はその由来です。まあ北海道の土地はお上の決め事で割り当てられたものが多く、裏山の軍馬山も高校の敷地にそのまま組み込まれたのでしょう。全体で290haもありこれがそのまま私のマイフィールドになったのでした。前置きが長すぎましたが、ここでカラタカ君の越冬についてじっくり観察することができたのでした。



標茶観察記 マイフィールド軍馬山

標茶の3年間、マイフィールドだった軍馬山を少し紹介します。釧路湿原の北のはずれに位置し、ミズナラ主体の落葉広葉樹林でおおわれたのっぺりとした標高110mの低山です。湧水から流れ出す小河川に池を作ったり様々な環境教育の場に活用しています。ヒメウスバとウスバ、ナミヒとコヒが混生するという道東の低地と山林のすみわけの際にあるという面白さもあります。カラタカは遊歩道入口で出迎えてくれます。赤マークが観察ポイントです。



「環境」の学習①



双子池で実習②



ビオトープで解説する③

ミニ河川の手入れ作業④

標茶観察記他のマイフィールド

標茶での3年間では、軍馬山の他いくつかのマイフィールドを発掘しました。塘路湖・シラルトロ沼周辺は釧路の行き帰りにも寄ることができる場所でサルボ展望台やコッタロ展望台の遊歩道は景色も抜群気分の良い所。雷別・五十石・多和林道ではナミヒとコヒが分布し、他にもゴマシジミ、チャマダラ、ギンイチ、ウスバなどなど興味深い種が豊産します。茅沼にあるチョウの森は標茶在住の飯島一雄さんの所有地で明るい遊歩道にチョウの説明板が設置されています。キャンプ場の脇には小さな展示コーナーもあるという場所で、蝶屋にとって自慢できるフィールドです。標茶は道東の中心に位置し、摩周湖や川湯へも30分もあれば行けるという観光にも便利なところでした。

カラタカ君との出会いは五十石で、そういえば大学時代、夜行列車で来たところだなあと思いだしたりしました。その時アサマシジミも1頭ゲットしたはずですが、アサマは旧JR標茶線あたりを探りましたが3年間Nullでした。校務の合間や校務と見せかけての軍馬山の他これらのフィールドでさまざまな観察ができた充実した3年間でした。



カラタカ標茶観察記①

標茶の3年間の観察記録を日誌から拾い上げ表にまとめてみました。2007年は軍馬山で越冬の様子を野外観察できました。越冬の野外観察はそれまで無かったもので、この様子は「完本」「フィールド版」「新刊本」に掲載できました。これらの出版の前に実は2009年に簡単に釧路昆虫同好会の会誌「Silvicola(カラタカの種名)」に、サトとヤマ、ナミヒとコヒ、ウスバとヒメウスバの関係などと共に報告を書き原稿を送ったのですが、査読で一度戻されて、直そうとしてそのままになっていました。写真は省きますがまとめの文だけ載せておきます。

カラタカ観察記録標茶

	2007年		2008年		2009年	
4月			20日 軍馬山 越冬巣			
5月			3日 軍馬山 移動			
			6日 飼育 越冬巣	14日 飼育 蛹化		
			11日 飼育 蛹化	23日 飼育 羽化		
6月			3日 軍馬山 蛹			
			4日 軍馬山 蛹			
			7日 五十石 2♂+OB			
			9日 飼育 羽化			
			15日 軍馬山 OB			
	17日 五十石 18♂6♀		16日 軍馬山 OB			
	23日 標津 OB		19日 塘路 OB			
	24日 中標津 OB		22日 中標津 1♀+OB			
7月	1日 茅沼 Null		25日 飼育 採卵			
	18日 多和 1齢		26日 飼育 採卵18卵			
8月	19日 五十石 2~3齢		8日 飼育 ふ化			
			24日 軍馬山 若齢			
9月	22日 五十石 亜終齢					
	23日 軍馬山 亜終齢					
	29日 軍馬山 終齢					
	30日 軍馬山 終齢					
10月						
11月	3日 軍馬山 越冬巣					
	11日 軍馬山 越冬巣					
12月	9日 軍馬山 越冬巣					

カラフトタカネキマダラセセリ *Carterocephalus silvicola*

【観察地・記録】 軍馬山(2007・6・17 2008・6・16) 五十石(2007・6・17 2008・6・9) 塘路湖畔(2008・6・19) 他各地に普通。

【食草】 イワノガリヤス(軍馬山・五十石・茅沼・多和)

【生活史】成虫は5月下旬~6月に出現。

越冬について2007年に軍馬山で9月から継続観察したところ、9月23日に終齢(おそらく5 齢)になり、10月下旬からイワノガリヤスの葉2,3枚をつづり越冬巣をつくった。食草はそのまま立ち枯れ、12月に野外から持ち帰り経過を見たところ、翌年越冬からさめた幼虫は摂食することなく5月11~13日に新たな巣を造りその中で蛹化、6月5~9日にかけて羽化した。

2008年に人工採卵した飼育経過は次の通り。6月22日中標津町で♀採集、6月25~28日イワノガリヤスに産卵(約20卵)7月7・8日孵化(卵期約2週間)。幼虫若齢時は巻いた葉の中に隠れるが、4齢ころからは葉に台座をつくるだけの場合と2~3枚を集めて巣を造る場合がある。越冬に入る経過は野外と同様で5齢で越冬巣を造り、翌年5月14日から蛹化を始め、5月20~23日に羽化した。(2♂3♀)

カラタカ標茶観察記②成虫～幼生期

2007年6月17日、五十石駅の近くで久しぶりにきれいなカラタカ君たちに出会いネットを振り写真を撮りました。線路沿いの草むらに翅をきらきら輝かせて飛び回っています。交尾しているペアにも出会いました。下の上の段の写真です。ほどなく軍馬山にもいることがわかり、よーし、幼生期もいただきだと本腰を入れました。最初の巣は新フィールド多和で見つけました。下の段の写真たちです。食草はどこも同じようなノガリヤスの仲間です。当時はイワノガリヤスとしていますが、きちんと専門家に同定してもらってはいません。専門家でも難しいと聞いています。



吸蜜する♀ 2007・6・17 標茶町五十石



交尾(上が♀) 2007・6・17 標茶町五十石



♂見張り活動 2007・6・17 標茶町五十石



2007・7・18 1齢の巣 標茶町多和



2007・8・19 1齢 標茶町五十石



2007・8・19 2齢の巣 標茶町五十石

カラタカ標茶観察記③ 越冬前後

2007年の9月に入り軍馬山の入り口すぐの崖の上に何匹かの亜終齢の巣を見つけ、これを追跡することにしました。カラタカ幼虫は若齢の時は葉を筒状に巻いた巣をつくり中に隠れますが、体が大きくなると写真のように台座をしっかり作り葉の上に止まっています。10月に入ると終齢は、ほとんど摂食しなくなり、食草を束ねた越冬巣をつくり始めます。11月に入り霜が降りると食草は枯れ始めます。11月22日の観察で、越冬巣を開いてみると凍死したのか黒く変色したものもありました。テープを張りその後の経過を見ることにしましたが、12月に入っても雪はなかなか降りません。越冬巣は寒風にさらされていました。



亜終齢幼虫 2007・9・22 軍馬山



終齢幼虫 2007・9・30 軍馬山



越冬巣と凍死した個体 2007・11・11 軍馬山



寒風にさらされる越冬巣 2007・12・9 軍馬山

カラタカ標茶観察記④ 越冬前後

標茶に厳しい冬が来ました。道東の内陸にあるので放射冷却に寄る冷え込みが強く、今冬一番の冷え込みで「標茶では-10°C」としばしば全国ニュースで報道されます。北西の季節風が流れ込んでも道東にまで雪雲は入らないので晴天です。なので地面はキンキンにシバレテ行きます。枯葉を束ねたカラタカ君の越冬巣は大丈夫なのでしょう。長い冬が明け、4月20日に越冬巣を見に行きました。案の定死んでいるのもいましたが生きていそうなものもありました。そしてもぬけの空なものもありました。どうも巣を脱出しているようです。それで生き残りを持ち帰り様子を見ることに。すると淡い枯葉色の越冬幼虫は巣を出て、新しくゆるめの巣を綴り、中で5月11日から蛹化し始めました。蛹は頭の先が伸びて枯葉によく似たスタイルでした。そして約1か月後の6月9日に羽化しました。



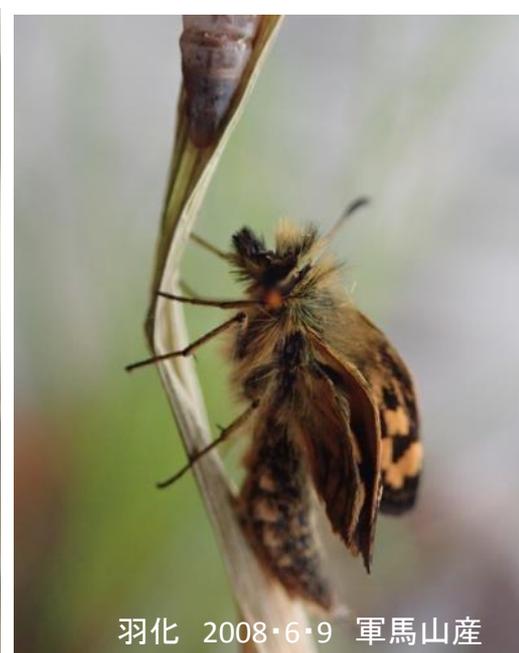
巣を出て新しい巣をつくる終齢 2008・5・11 軍馬山産



新しい巣で蛹化 2008・5・16 軍馬山産



羽化近い蛹 2008・6・3 軍馬山産

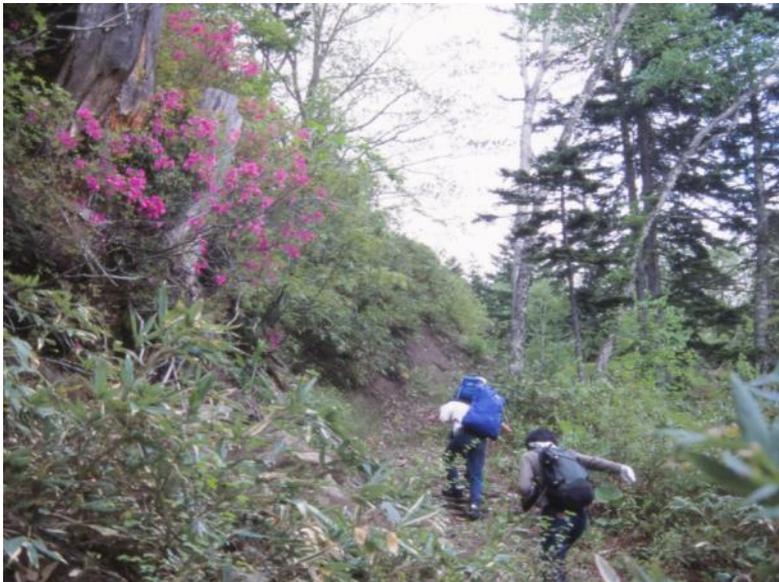


羽化 2008・6・9 軍馬山産

その後の観察記録① 富良野から

ということで偉大なフィールド軍馬山のおかげで、記録した一通りの生活史について「完本」「フィールド版」で紹介することができました。さて標茶以前では、日高T林道で少々撮影したくらいで結局成果は無かったのですが、一応チャレンジしたことだけ紹介しておきます。それは高校の科学部の「風穴植生」の研究に付き合っていた時です。風穴は岩礫崩落地にできるのもので夏に冷風が吹き出し地温が下がり高山植物が成立します。その風穴がある場所をいろいろ当たっていたところ、知り合いの山男が富良野西岳にあるよと風景写真を見せてくれました。そしてこんな蝶もいたよと差し出した写真はまぎれもなきカラタカ君でした。やっぱり芦別山群にもいるんだ。と、道なき道を地形図を読みながらルート探索し風穴地目指しました。沢沿いを詰め、地滑り地帯をへずり、ネマガリダケのやぶを漕いでヒーヒー言いながら、富良野西岳直下の岩礫崩落地に到達しました。景観は然別湖周辺の風穴地帯に似ています。ノガリヤスの仲間も生えていて、いそうな雰囲気ですが、ちょっと時期が早すぎたのかカラタカ君を見つけることはできませんでした。ただし目的は風穴植生なので生徒たちは一生懸命にデータを取ってはいました。私はカラタカ君ですが…。その後は行けてません。体力的にもう無理か？

富良野西岳直下の岩礫崩落地で調査 1999・6・10
「先生もう少しで開けてきそうです。」(下)
崩落地だ。ナキウサギの声が聞こえる(右)
ノガリヤス属がありますね。⇒

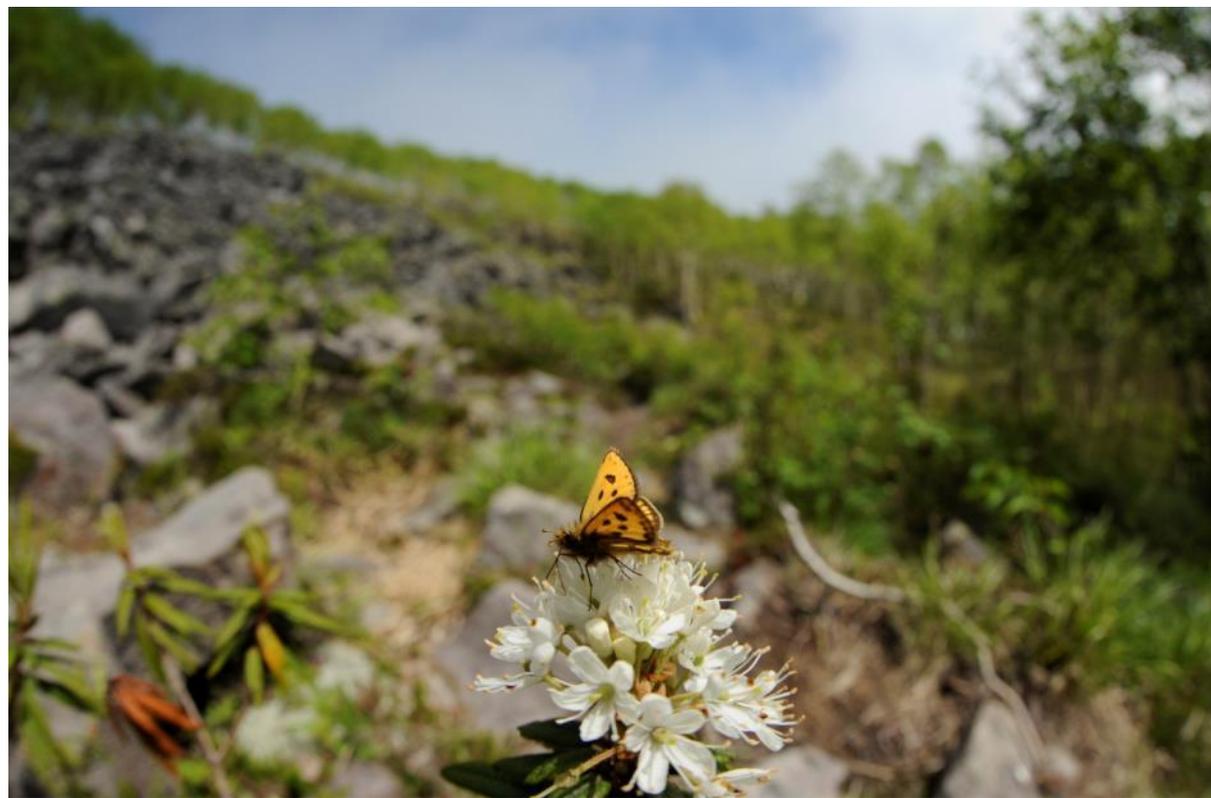


その後の観察記録②然別

その後のカラタカ君のつけたしです。まずはじめは富良野で空振りした風穴植生地のカラタカ君です。然別の東ヌプカにはずいぶん通いました。目的はカラタカ君ではなくカラルリ君です。「フィールド版」にはなんとか終齢と蛹を撮影しなくてはなりません。写真は2018年6月16日カラルリ終齢を空振りしたときのカラタカ君です。



ガレ場で綺麗な♂が吸蜜・占有行動をしていました。

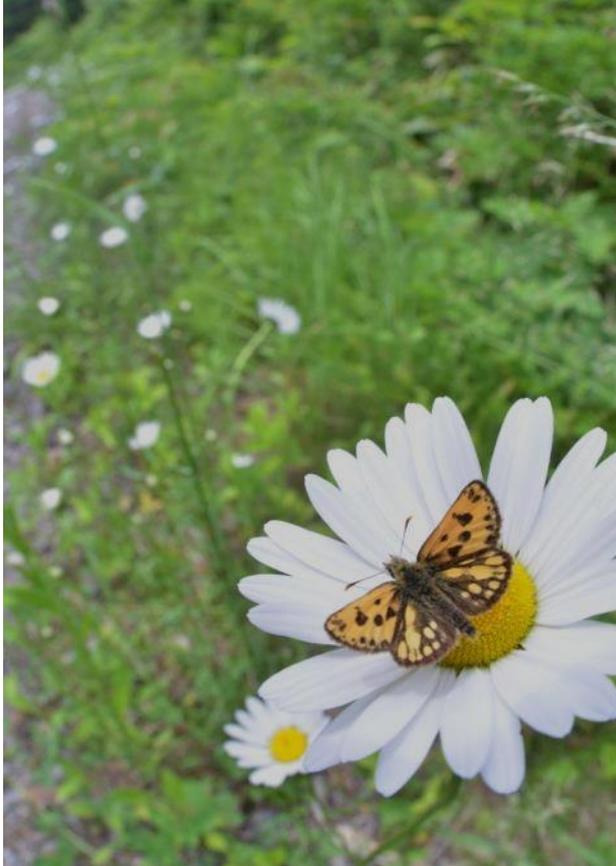


花はエゾイソツツジ

その後の観察記録③忠類にて

忠類は虫研の後輩たちが開拓しカラタカの幼生期解明に貢献したフィールドです。富良野から狩勝峠を超えるとただっ広い十勝平原が広がります。虫研の紀藤さんたちが観察したフィールドはその平原の南東の縁に位置するスキー場周辺の草地です。行ってみるとへえーこんなところに？と思うのですがいるのです。チャマ君もカラフトヒヨウモンも飛んでいます。「フィールド版」の芝田さんの超絶飛翔写真もこのあたりで撮影されたもの。私も幼虫を含めて撮影してみました。いやあいいところですよ。

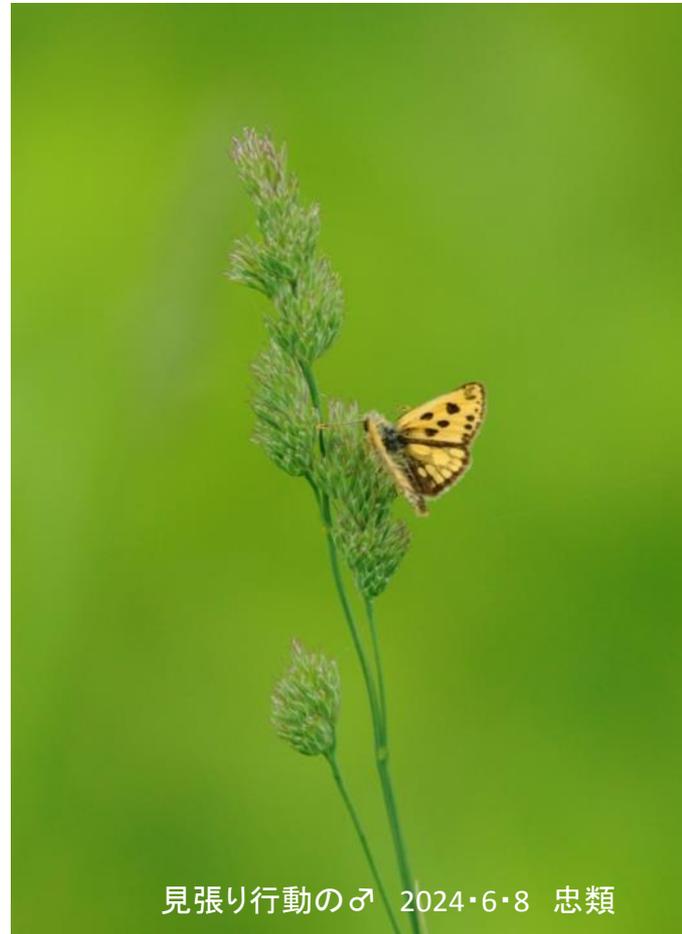
林道わきで吸蜜する♂ 2022・6・19 忠類



エゾレンリソウで吸蜜する♀
2021・6・11 忠類



見張り行動の♂ 2024・6・8 忠類



巣から出てきた亜終齢 2022・8・23 忠類



亜終齢の巣 2022・8・23 忠類



その後の観察記録④日高T林道

その後の観察つけたしです。その①は日高のT林道でツマジロの成虫を探していると、カラタカ君の成虫に、同じく幼虫探しではカラタカ君の幼虫に出会います。それもそのはず同じ食草で育っているからでしょう。標茶や十勝ではカラタカは6月の蝶ですが、ここは若干発生が遅れるようでツマジロ君ともかぶって発生し7月いっぱい見られます。幼虫探しでは葉が巻かれていればカラタカ君。斜め切り食痕がツマジロ君です。

ツマジロポイントの♂ 2024・6・28日高町



若齢の巣 2015・8・8 日高町



巣に隠れる若齢 2015・8・8 日高町



交尾 2018・7・14 日高町



コチャバナセに求愛する♂ 2024・6・28日高町

その後の観察記録⑤三国峠

その後の観察つけたしのつけたしです。その②は三国峠での産卵観察です。相棒の辻氏と、オオイチの幼虫・蛹やカラフトヒョウモンなどを探しに虫研後輩Mさんのポイントを回ってみました。そこでカラタカ君に会い、その♀が目の前で産卵してくれました。産卵はあまりにテキパキ行われ写真は撮れませんでした。産卵植物はチモシー。カラタカ君こんな雑草にも産むんですか。ちょっとがっかりです。写真はすべて2019年6月30日

相棒とカラタカがいた草むら



産卵した♀がカメラに



卵をここに産み付けた



産付された卵

おわりに

1994年7月2日～11日、カラタカ君の故郷（？）樺太(サハリン)に行ったことがあります。林道わきの草原や林間草原に普通に飛んでいました。数は少ないものの同じところでタカネ君(幼ネキマダラセセリ)も飛んでいて少々採集してきました。いつも思うのですがタカネ君はなぜ北海道にいないんでしょうね。逆にサハリンでは普通種のカラタカ君はなぜ本州にいないんでしょうね。過去に別れ別れになるとんなドラマがあったのでしょうか。この兄弟たちは昔昔に北の方からやってきたのですが、寒冷期がどんどんすすんでいくと、カラタカ君はどこか寒さをしのぐ場所を見つけたのですが、タカネ君は「とても寒くて住んでられない！」と消えてしまったのかもしれませんが。カラタカ君の越冬幼虫の標茶でのシバレ具合を見てそんな気がしました。あくまで個人の感想です。

サハリンの兄弟種



カラフトタカネキマダラセセリ

タカネキマダラセセリ

いずれも1994年7月7日ティモフスコエで採集